

# 肢体不自由特別支援学校における 教育課程の編成と実施に関する研究

—自立活動の時間における指導と教科等の指導との関連から—

○落合優貴子

安藤隆男

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 肢体不自由特別支援学校 教育課程編成 教育課程実施

## I. 問題の所在と目的

教育課程の編成主体は各学校であり、各学校は学校教育活動全体を通じた自立活動の指導の充実を図るために、教育課程の編成と実施にあたり、組織的、階層的な体制整備を行い、組織間の連携を図っていると考えられる(独立行政法人国立特殊教育総合研究所, 2014)。つまり、教育課程には、編成を中心に行う組織・教員(第1層)と実際に編成に基づいて授業を実施する教員(第2層)がかかわっている。また、授業を行う中で第1層の教員と第2層の教員との間に乖離が生じるため、教育課程改善を行うことが必要となる。

そこで本研究では、肢体不自由特別支援学校において教育課程の編成と実施の現状(手続き)を明らかにするとともに、その成果と課題を検討することを目的とする。

## II. 第1研究

### 1. 目的

肢体不自由特別支援学校における教育課程の編成と実施に関する成果と課題を具体的に明らかにする。

### 2. 方法

対象者: インタビュー調査への同意が得られた肢体不自由特別支援学校の教諭または勤務経験のある指導主事計3名

手続き: インタビュー調査

### 3. 結果と考察

対象者3名の語りから得られた課題は18項目あり、分類した結果5つのカテゴリが生成された(Table 1)。

Table 1 分類されたカテゴリ

分類されたカテゴリ
①自立活動を主とする教育課程における教科及び自立活動の枠組みの設け方について
②学習の系統性及び学びの連続性について
③自立活動に関する教員の認識の共通性について
④自立活動を担当する教員と教科を担当する教員の連携について
⑤児童生徒の実態把握について

①の課題は、教科の内容の精選について手続きのあいまいさ(川間, 2004)が指摘されている。②の課題は、進学のための受験を想定した場合、各教科等との関連、指導の重点の置き方と順序、まとめ方を十分に研究し、工夫する必要性に関する指摘(佐藤, 2006)と一致する。また、児童生徒の学習について何がどれだけできているのか不明確で、次のステップがわかりにくく、指導者が変わると方法も変わるため、系統的な指導が難しい(目, 2004)との指摘と一致する。⑤の課題は、教員が個別の指導計画の中核をなす実態把握やそれに基づく目標、内容を設定したものの、確信がない(安藤, 2004)という指摘と一致する。

## III. 第2研究

### 1. 目的

第1研究において明らかになった具体的な課題について、教育課程に関する研究を先行的に行い続けているE県特別支援学校の問題解決プロセスと照らし合わせ、課題に対する取り組みの成果と残された課題を明らかにする。

## 2. 方法

対象校: E県は長年教育課程の研究に取り組んでおり、E県特別支援学校は日本特殊教育学会やE県が位置する地区の肢体不自由教育研究協議会においてその成果を常に発信してきた。

対象者: D教諭は、E県特別支援学校高等部の自立活動専任の教員である。11年前に同校に着任し、現在は高等部の自立活動専任を務めている。「教育課程改善プロジェクト」のコア・メンバーとして、これまで複数の立場から同プロジェクトにかかわっている。

手続き: インタビュー調査

## 3. 結果と考察

教育課程改善プロジェクトをもとに、D教諭を含めた教育課程検討委員会の教員が積極的に活動していた。自立活動の時間における指導を適切に行うためには、各教科の内容の精選が適切に行われているか、あるいは適切に定める仕組みが各校で機能しているかどうかが問題であり(川間, 2004)、①の課題に対して「教科をベースとした考え方で児童生徒によっては幼稚園の教育要領や学習到達度チェックリストを参考に」「単元構成表を作成する」取り組みは、D教諭が勤務する特別支援学校において独自に行われているものと考えられる。②の課題に対して「『卒業までに身につけさせたい力 マトリクス』を類型ごとに作成する」ことで学びの系統性を担保することにつながると考えられる。「学びの履歴の残し方や各学部段階で身につけさせたい力をわかりやすく明記する」という残された課題は、尾崎(2013)においても指摘されている。⑤に対する「自立活動チェックリスト(6区分424項目)を使用する」取り組みは、D教諭が勤務する特別支援学校独自の取り組みであり、「教員間の共通認識」に有効であると考えられる。「自立活動の枠組みの中で完結してしまい、教科との関連が十分にはできていない場合がある」という残された課題は、吉川(2014)も指摘している。

## IV. 総合考察

第1研究、第2研究を経て、具体的な課題と課題に対する取り組み・取り組みの成果・残された課題が明らかになった。具体的な課題は、以前より先行研究で指摘されている課題と一致するものが多く、重要な課題であることが改めて示された。課題に対する取り組みは、D教諭が勤務する特別支援学校において独自に行われたものが多く、それらは先行研究において有効性が示唆されるものであった。しかしながら、残された課題も存在しており、それらの課題については今後さらなる検討が求められる。

### 主要文献

独立行政法人国立特殊教育総合研究所(2014)「特別支援学校及び特別支援学級における教育課程編成とその実施に関する研究」研究成果報告書(平成24年度～平成25年度)。(OCHIAI Yukiko, ANDO Takao)  
(今回の学会発表について、対象者より同意を得ている。)